活動報告会

Activity report meeting

【平和のつどい】

日　時：令和６年８月２４日（土）午後１時３０分～５時
場　所：男女平等参画センター　リーブラホール

プログラム

第１部　語り継ごう、平和への想い
～港区平和青年団及び広島派遣中学生活動報告会～

●広島市長・長崎市長・八女市長からのメッセージ代読
（細田 早紀、亀山 紗来、小林 洋太）

●港区平和都市宣言朗読　（須藤 栞央、辻 孝太朗、早川 妃空）

●平和青年団活動報告会

【事前研修】
・「港区語り部の会との交流」　亀山 紗来
・「都立第五福竜丸展示館見学～白い「何か」～」　藤田 睦月
・「昭和館見学～昭和館～」　細田 早紀
・「しょうけい館見学～私がしょうけい館で学び感じたもの～」　上野 稟仁
・「東京大空襲について～東京の先輩たちの体験を今に活かす～」　伊藤 優希
・「ウクライナからの避難者との交流～Дякую～」　亀田 知沙

【長崎派遣研修】
・「青少年ピースフォーラム１日目～時代も距離も遠く離れた誰か～」　安達 功太郎
・「青少年ピースフォーラム１日目～青少年ピースフォーラム１日目を通して～」　辻 孝太朗
・「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典～長崎平和祈念式典に参加して思ったこと～」　小林 莉奈
・「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」　田中 陽暖
・「青少年ピースフォーラム２日目～国際的な対話から学ぶ平和への道」　古山　智
・「青少年ピースフォーラム２日目～ピースフォーラムでの出会いと学び」　須藤 栞央
・「長崎平和関連施設を巡って～ナガサキに立って～」　小林 洋太
・「長崎平和関連施設を巡って」　早川 妃空

第２部　被爆体験伝承講話

第３部　平和祈念コンサート

港区語り部の会との交流

亀山 紗来

自分は今まで博物館や資料館での見学を通じて戦争の悲惨さを思い知りました。しかし、語り部の会との交流によって、戦争の現実がより一層身近に感じられました。戦争経験者の方々から学童疎開についてのお話を伺い、幼い子供たちが親元を離れて都会から田舎へと移動せざるを得なかった状況を痛感しました。

戦争が進むにつれて、敗戦の色が濃くなる中、空襲が頻発し、上層部の考えに反し、多くの一般市民が命の危険に晒されました。防空訓練では、バケツで水をかけて消火することが推奨されましたが、実際には空中で爆弾が次々と散り、木造の家々が火の海となる現実に直面しました。語り部の方の経験を通じて、戦争がもたらした悲劇と人々の苦しみを深く理解し、平和の大切さを改めて実感しました。

核を世界からなくすことが現実的に非常に難しい状況下、将来、自分がどんな立場で、どんな意思決定により、どんな貢献ができるか考えさせられました。一足飛びに核兵器がない時代を作ることは難しいですが、政治的、経済的、技術的、社会的に、少しでも有効な解決策について、考える機会になりました。

もし、核兵器と共存しなければならない現実から逃れられなかったとするならば、二度と核兵器が使われない未来を目指さないといけないです。その為には、世界の９０％以上の核を保有しているアメリカやロシア、そして、その他の核所有国の若い世代が、互いに交流し、核の必要性について、何を考えているかを理解し、次世代に向けて、核が使用されないメカニズムや枠組みを作っていくことを目指すことが重要だと思いました。

この世界から、価値観の違いや資源の争いなどの対立がなくならない限り、戦争や紛争をなくすことはできないかもしれない。しかしながら、例え、私たちが紛争からかけ離れた遠い国の国民だとしても、持続可能な平和の構築を目指し、今の自分にできることを実行し、将来、必ず、世界平和に貢献することができるのではないかと思っています。

都立第五福竜丸展示館見学
～白い「何か」～

藤田 睦月

マグロ延縄漁船だった第五福竜丸の乗組員たちは空から降ってくる白い「何か」を浴びながら、必死に作業を続けました。ビキニ環礁に近いロンゲラップ環礁に住んでいた子供たちは、見たこともない白い「何か」を「パウダー」と呼んで集める遊びをしました。白い「何か」は、放射線を出す放射性降下物、いわゆる「死の灰」でした。

第五福竜丸からは強い放射線が検出され、マグロはすべて廃棄されました。同じように魚を廃棄した漁船は少なくとも８５６隻で、廃棄された魚の量は４８５．７トンにものぼります。しかし、ほとんどの船の乗組員は検査も調査もされず、被害を訴えることも出来ませんでした。

終戦から９年後の１９５４年、ビキニ環礁で使われた水爆「ブラボー」が日本を一変させました。マグロが放射能汚染されたことにより魚は敬遠され、漁業関係者や魚屋など多くの方が被害を被りました。日本に強い放射能を含む雨が降るようになり、その原因はビキニ環礁周辺にあるとも判明しました。

一方、これらの事実をもってしても、アメリカは第五福竜丸をはじめとする一連の被害を認めず、７０年たった２０２４年の今に至るまで明確な謝罪は行っていません。

老朽化の結果、江東区夢の島に係留されていた第五福竜丸は、地元・江東区民の間から保存運動が始まりました。署名や募金を元に、船体の保存や海に沈んでいたエンジンの引き上げなど、様々な活動が行われました。

知ろうとすることがどれだけ重要か。発信することがどれだけ大切か。私たちは今一度、自分たちの行動を見直すべきではないでしょうか。

昭和館見学～昭和館～

細田 早紀

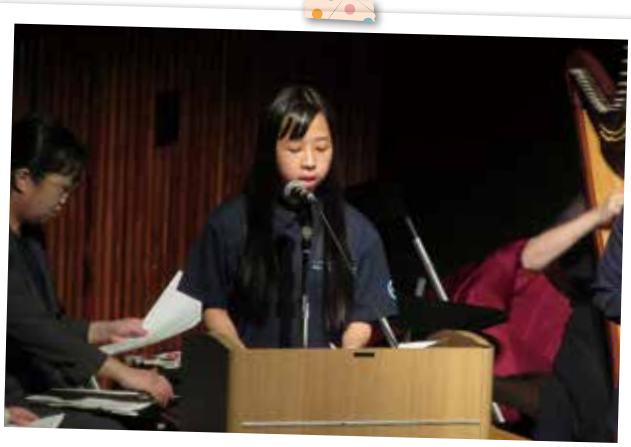
わたしたちは昭和館という施設を訪れました。昭和館では、戦中・戦後の国民生活に関する様々な資料が展示されており、歴史の教科書や授業では学べない当時の人々の「ありのまま」を通じて、戦争に対する理解度を深めることができました。その中でも、私が特に印象的だった３つの展示についてお話します。

まずは、人々が使っていた日用品の変化についてです。戦争が長期化するにつれて、米や金属といった生活に不可欠な資源が不足するようになると、人々は穀物やイモ類を混ぜたご飯で飢えをしのいだり、鉄の代わりに陶器を使うなど、代替品を使って生活を送るようになったと言います。食べるものや使うものすら自由に選べないという当時の状況を思うと胸が痛くなりますが、限られた資源の中でも懸命に生き抜く人々の姿を垣間見ることもできました。

つぎに、当時の子供たちが受けていた教育についてです。戦況が激しくなると、小学校は国民学校、子供たちは少国民という名前に改められ、より軍国主義的な内容の学習をするようになりました。さらに、終戦間際には学校に行くことすらもままならず、幼い子供たちは疎開に、中高生たちは工場や農場に働きに出ることを強いられたというのです。私たちは今、当たり前のように学校に通い、学びを得ることができていますが、その「当たり前」も当時の人々にとってはとても貴重なものであり、私たちにとってもかけがえのないものであるのだと深く実感しました。

最後に、雑誌や広告といった、当時普及していた娯楽についてです。これらには、平成生まれの私から見てもおもしろい、すてきだと感じるものが多く、当時の人々が私たちとなんら変わりのない感性を持っていたのだなと実感しました。しかし、そんな彼らが、たまたま戦争の時代に生まれてしまったが故に、苦しい生活を強いられたのだと思うと、筆舌に尽くしがたい無念さを感じました。

この昭和館見学を通し、私はこの現実をより多くの方に知ってほしいと感じました。この平和のつどいが、皆様が昭和館へと足を運ぶきっかけになれば幸いです。



しょうけい館見学
～私がしょうけい館で学び感じたもの～

上野 稟仁

しょうけい館には戦争で負傷したり、病気になってしまった戦傷病者の体験した苦労や社会復帰までの過程とその家族に関連することが写真、映像、文献などで残されています。私たちはそれらを見学し、戦傷病者がどのような状態であったかを学んできました。

私たちは普段学校では、戦時中の人々の暮らし、原爆による被害、戦後からの復興といったことについて学習していきます。しかしながら戦地から負傷しながら帰還した方々、原爆や空襲によって幸いにも命を落とすことがなかった代わりに想像も絶するほど大きな後遺症を負った方々が、その後どういった生活を送ったかについてふれることがありませんでした。このしょうけい館で初めて詳しく、具体的な生活での苦労を知ることができました。

その際、戦傷病者の方やそのご家族の方々にとっては戦時中の苦労が亡くなるまでずっと続いていたのだなと感じました。なぜそのように感じたのかというと戦地で負傷した際には衛生面や医療器具の問題もあり手や足の切断を余儀なくされたり、弾丸や爆発物の破片が脊髄を損傷させ下半身不随などになってしまった方々が大勢おり、そういった方々の生活をご本人やそのご家族の証言、写真等で知ったからです。

現在も苦しんでいる方がいるという事実に、戦争とはただ単純に過去の出来事として捉えるべきではないと考えます。現に戦傷病者の戦地等での過酷な経験や、怪我や病気と生涯向き合っていかなければならないという葛藤、それを支えた家族の想いが体験記として展示されており、私たちは戦争を体験された方々の心に寄り添い再びおなじような惨状にならないよう、これらのことを未来へつなぐ義務があると思います。

東京大空襲について
～東京の先輩たちの体験を今に活かす～

伊藤 優希

第４回事前研修では、東京大空襲・戦災資料センター学芸員の比江島さんにお越しいただき、空襲に至った経緯や空襲下での生活など、貴重な話をしていただきました。

太平洋戦争中、東京だけでも１００回を超える空襲を受けており、その中で東京大空襲は一晩で約１０万人の死者を出してしまいました。この「１０万人の死者」という言葉に、真剣に向き合うことの大切さを比江島さんはお話しして下さり、今も印象に残っています。

歴史の教科書に書かれている、あらゆる戦争の死者数をただの数値としてのみ捉えてしまう学生は多いと思います。確かに、ペーパーテストで点を取るにはそれで十分なのかもしれません。しかし、本質には、１０万人の一人一人に大切な命、そして家族があることを忘れてはいけません。また、比江島さんはこの１０万人の中でも、特に疎開せずに家に残った母親とその子供がより多く亡くなられていることを伝えてくれました。

もう一つ僕が印象に残ったことは、学童疎開についてです。今まで僕は、疎開について子供たちを戦争から守るために行われたものだと認識していました。しかし実際は、消火活動の足手まといになるから、そして未来の兵士や働き手を温存したかったから、と政府が戦争を続けるために疎開されたのだと知り、当時の社会の異常さを痛感しました。

現在、台湾有事の緊張が高まっており、日本も巻き込まれる可能性を考えざるを得ません。そんな中、昔とは違い、今は自分で必要な情報を得ることができる時代です。だからこそ、当時のように、政府の思惑のままにされるのではなく、一人一人がこれからの平和について考えていくことが、大切な命や仲間を守ることに繋がるのだと思います。

ウクライナからの避難者との交流
～Дякую～

亀田 知沙

ウクライナからの避難者の方との交流では、ウクライナから避難してきた方（オルガさん）から彼女自身がウクライナから日本に避難して来るまでや、日本に来てから起こったことや感じたことを伺うことができる貴重な機会でした。写真やスライドを使いながらどうやってここまで来たのかを教えていただきました。日本語だけでなく、日本の習慣や文化で困ったことや驚いたこともあるそうです。

他にも、私たちからの質問や疑問にも答えてくださいました。例えば、ポーランドに避難する人が多い中、日本を選んだ理由についての質問です。日本は幼稚園、小学校、住居などの手当てが充実しているからとおっしゃっていました。私はなんだか誇らしかったです。

最後に、ウクライナの遊びを教えていただきました。例えば、ウクライナのじゃんけんには、グー、チョキ、パー以外に井戸があることです。井戸以外は全てルールは同じです。井戸は、チョキとグーに勝ち、パーには、負けるそうです。遊び方を教えて貰った後で、みんなで、じゃんけんをしたり伝言ジェスチャーゲームをしたりしました。初めて聞いたルール、遊びもありましたが、とっても楽しかったです。

この研修を通して、なかなか聞くことのできない貴重なお話を聞くことができました。改めて、どこの国の人だから悪いなどと考えず、相手を知っていきたいと考えました。オルガさんДякую.（ありがとうございました）。

青少年ピースフォーラム１日目
～時代も距離も遠く離れた誰か～

安達 功太郎

　私たち港区平和青年団が長崎に来て最初の学習ですでに、長崎に来ることの意義、重要性を感じることになりました。

　それは被爆者・松尾幸子さんの、世界が終わった１日のお話でした。ある日体験した「悲しさ」さえも感じさせない恐怖、誰だか認識できないほどに変わり果てた形相の人々、瞬きする合間に消えた町、その話すべてを事実だと認識すればするほど、見えないはずの当時の風景が目の前に広がりました。すると、他人事のようにも感じていた、時代も距離も遠く離れていると感じていた原爆の惨状が、リアルに、恐怖心、哀惜、罪悪感を伴って目の前に現れたのでした。皮肉にも戦争は、個々の自分勝手な平和を守りたいという意思から来ていると思います。国を守りたい意思、武器を売ってお金を儲けて豊かに暮らしたいという意思。一部の誰かの利益につながったり、一部の誰かの平和につながる限り、戦争はなくなりません。戦争をなくすためには、誰かではなく誰もが平和につながる道を探さなくてはいけません。

　私は将来、科学者となりエネルギー問題を解決することで、平和に貢献したいと思います。エネルギーは国が動くほど大切なものです。もし半永久的に使えるエネルギーを見つけることができたら、世界は平和に近づくと思っています。

青少年ピースフォーラム１日目
～青少年ピースフォーラム１日目を通して～

辻 孝太朗

青少年ピースフォーラム１日目では、被爆者の方の被爆体験講話や原子爆弾について学んだ後、爆心地周辺のフィールドワークを行いました。

被爆体験講話では、実際に長崎で被爆された方から被爆当時の体験を聞きました。その中で一番印象に残ったのは、被爆直後は何が起こったか分からず、人の死に何も感じていないと仰っていた事です。それほど自分の事しか考えられず周りの事を考えられなくなるほどに原爆の被害が甚大で悲惨だった事が伝わってきました。また、被爆した事が原因で持病があり、現在は約１０種もの薬を毎日飲んでいるそうです。原爆によって今も苦しんでいる方々がいる事を忘れてはいけないと思いました。

原子爆弾について学んだ後、会場周辺でフィールドワークを行いました。爆心地公園には被爆した浦上天主堂の壁の一部があり、とても強い爆風によって石柱がずれているのが分かりました。また近くには長崎原爆朝鮮人犠牲者追悼碑があり、これは原爆の犠牲になられた、朝鮮半島から強制的に連れてこられた多くの方々の追悼のために作られた碑です。外国の方々も被爆された事も忘れてはいけないと感じました。

長崎で見たり聞いたりした悲惨な出来事はすべて１個の原子爆弾で起きました。世界では現在までに２０００回以上の核実験が行われており、約１２０００発もの核弾頭があります。被爆者の方も仰っていた核の廃絶への道のりは長いと思いますが、自分にもできることを見つけ、行動していきたいと思いました。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典
～長崎平和祈念式典に参加して思ったこと～

小林 莉奈

８月９日の長崎平和祈念式典に出席する朝、アメリカを含む７カ国の駐日大使がイスラエル不招待を理由に欠席するというニュースが流れていました。イスラエルを招待しないことで、同じく招待されていないロシアやベラルーシと同列に扱うことになるという理由から、長崎に原爆を落としたアメリカが欠席するのは、私にとっては、納得しがたいものでした。私自身は原爆の当事者ではないため、意見を押し付けることはできませんが、戦争中の国も含め、全ての国を招待すべきだったと思います。私は戦争をしている国こそ参列して欲しかったです。

平和祈念式典に参列しているその瞬間にも戦争は続いており、多くの市民が犠牲になり、同じ過ちが繰り返されています。平和を祈りながらも、戦争をしている国が参列していないこの式典で、平和を祈るこの気持ちに意味があるんだろうか、と感じました。

今回、平和祈念式典に参列するまで、正直自分の中での原爆や戦争に対する考えはとても曖昧だったと思います。ニュースを画面越しで見るのとは違い、現地で平和の誓いを聞き、合唱曲の「あの子」や「千羽鶴」の歌詞の一つ一つに戦争を感じ、一気に現実味を帯びました。

原爆投下から７９年が経ちました。被爆者の高齢化が進む中、私は平和祈念式典に参列したことで伝えるバトンを受け取ったと思います。そして、参列することによって、見て聞いて感じたことを、戦争をしている国や原爆を落とした国の代表者にも一緒に経験して欲しかった、と改めて思いました。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

田中 陽暖

長崎に一発の原子爆弾が投下されてから７９年が経ちました。原爆は、無差別にそして多くの尊い生命を一瞬にして奪ってしまう恐ろしいものだと、亡くなった方々や残された被爆者の方々の言葉を思い返すとどれほど辛くて憎いことだったかわかりました。

平和祈念式典では、内閣総理大臣などの方々のお話を聞いて私は、戦争の悲惨さや恐ろしさを再確認する事が出来ました。そして一つ一つの言葉が心に深く残りました。戦争は「絶対に二度とあってはならない事」だと強く思いました。

式典に参列するまでは、平和が当たり前だと思っていました。しかし悲惨な過去から今の日本があるのは、大勢の方々が力を合わせて計り知れない努力があったのだと感じました。そして「平和は人類共有の世界遺産である」という言葉に凄く共感しました。

私は、平和青年団として平和への願いや平和にするために私達が、何をしたらいいのかを考えさせられました。それは、人と人がお互い理解し合って手を取り合う事だとわかりました。また、今私達が平和な時代に過ごせる事に感謝し、平和の大切さや命の尊さ、戦争の恐ろしさなど、伝えなければならないと強く思いました。長崎で学んだ事を忘れずに自分の力で未来を切り拓いていこうと思いました。

青少年ピースフォーラム2日目
～国際的な対話から学ぶ平和への道～

古山　智

長崎派遣研修の青少年ピースフォーラム２日目では、高校生から社会人までの参加者が集まり、「なぜ戦争が起こるのか」というテーマについてグループディスカッションを行いました。参加者は、ピンク色の付せんに戦争の原因を書き、青い付せんにその解決策を書き出しました。私のグループディスカッションには、ポルトガルから来た女子高校生も参加しており、議論は主に英語で進行されました。

ディスカッションを通し、戦争の原因としては「宗教的・文化的な違い」、「人種差別」、「自己中心的な態度」、「情報不足」が挙げられました。これらの問題が複雑に絡み合うことで、誤解や対立が生じ、最終的に戦争へと発展する可能性があるという考えが共有されました。

その解決策として提案されたのは、「教育を通じた理解の促進」、「対話とコミュニケーションの強化」、「共感の育成」、「偏見の解消」などです。特に、情報を正確に伝えることや、異なる文化や価値観を尊重する姿勢が、戦争の予防に重要であるという意見が多く出ました。

このディスカッションを通じて、戦争の原因が多岐にわたり、それぞれに対する解決策が必要であることを改めて実感しました。また、異なる国や背景を持つメンバーが集まり、それぞれの視点から意見を交わすことで、より深い理解と共感が生まれ、大きな学びとなりました。この経験を基に、今後も対話を通じて平和への取組を続けていきたいと思いました。

青少年ピースフォーラム２日目
～ピースフォーラムでの出会いと学び～

須藤 栞央

ピースフォーラム２日目では、沖縄から北海道までの全国の高校生と「嘘つき自己紹介」や意見交換、「My 平和宣言」を自分たちで考え、意見を出し合い話し合いを行いました。「嘘つき自己紹介」では、真実と偽りの自己紹介を発表しどちらが真実かを当ててもらう形で自己紹介をしました。意見交換では２つの議題が出題され自分達で考えた意見を出し合いました。

１つ目はなぜ戦争はおきるのか？？なぜ喧嘩がおきるのか？？

２つ目は戦争を止めるにはどうすべきかの話し合いをしました。

１つ目の議題では経済的理由、文化的理由、価値観のすれ違いなどの理由で戦争が勃発するのではないかという意見が出ました。

２つ目の議題では、話し合いをする、相手を理解する、ゲームで勝敗を決めるなどの意見が出ました。

「My 平和宣言」では、自分の平和宣言を書き、みんなと共有し合いました。この体験で私が感じたことは、初めにみんなと「嘘つき自己紹介」をしたことで、年齢問わず仲が深まり様々な地域の話や文化や思い出などを聞ける貴重を持てたことです。

沢山話していると楽しい時間が過ぎるのはとても早く感じ少しさみしい気持ちも出てきました。

沢山の人達と話をしたおかげで、それぞれ戦争や平和に対してどのような考えがあるのか、また自分が感じる戦争や平和をどのように考え、どのようにして広めて発信していくのか、新しい世代の人達に戦争や平和について知ってもらうには私達はどう行動すべきかなどをより深く考える機会となりました。

長崎平和関連施設を巡って
～ナガサキに立って～

小林 洋太

戦地に赴く、それは平和と戦争に向き合う一番の方法です。

この言葉は僕が実際に高校生としてナガサキに足を運んで「かつての」戦地に全身で向き合うことができたからこそ分かったことです。

原爆資料館では視覚的、聴覚的情報に当たる被爆した展示品、原爆投下のジオラマなどが展示されていました。中のお米が焦げたお弁当、熱線で泡立った瓦など原爆を生で伝える貴重な資料を見ることができました。特に原爆の投下された時刻、１１時２分で針が止まった時計は、戦争は一瞬にして人々のかけがえのない生活を奪ってしまう残酷なものだということを強く訴えかけているように感じました。

フィールドワークでは視覚的、触覚的、嗅覚的にナガサキの町を感じることができました。被爆建物は原子爆弾が落ちた直後の様子を彷彿とさせるもので、鳥居が無残にも一本柱で立っている様子、７．５トンもの柱が傾いていた様子など、どの建物も今の生活からは考えることのできない風貌でした。また以前訪れたヒロシマの町と比較しながら色々な建物を回ることができたので、原爆についてより深く多角的に知ることができました。

これらの活動を通して五感で受け取ったことは原爆の様子を鮮明に想像させるとともに核や戦争の悲惨さというものを写実的に表すものです。また核や戦争の恐ろしさを実感するだけではなく、ナガサキの青空、街並みを見て、現在のナガサキの平和を享受することができ、戦争と平和の両方と見つめあうことのできた時間でした。

戦地に赴く、それは平和と戦争に向き合う一番の方法です。このことは「今の」戦地であるウクライナやイスラエルにも当てはまることです。

戦争を知らない世代を戦争を伝える世代にするために、「かつての」戦地を訪れた一高校生として今回学んだことを日本だけでなく「いまの」戦地を含めた世界に伝えていきたいと思います。

長崎平和関連施設を巡って

早川 妃空

長崎平和関連施設を巡ると、戦争の悲惨さと平和の大切さを深く実感しました。特に長崎原爆資料館と平和公園では、その影響の大きさと復興の歩みが鮮明に伝わってきました。

長崎原爆資料館では、原爆が投下された１９４５年８月９日の悲劇的な瞬間から始まり、原爆の影響やその後の復興に至るまで、多くの展示物や証言が私たちに伝えてきました。展示物には、原爆によって溶けてしまった遺品や、被爆者の手記が含まれており、その一つ一つが生々しく、原爆の恐ろしさを実感させられます。特に、当時の被爆者が描いた絵画や、実際の放射線による影響を示す医療資料は、単なる歴史の一部ではなく、現在に生きる私たちに対する強いメッセージだと感じました。

また、平和公園では、原爆で命を落とした人々を慰霊し、平和を願う気持ちが強く表れていました。園内には、平和の鐘や平和の像があり、それぞれが平和の大切さと戦争の恐怖を忘れないための象徴として存在しています。特に、「平和祈念像」や「原爆死没者慰霊碑」を前にすると、心からの祈りとともに、平和の尊さを改めて感じることができました。

これらの施設を訪れることで、単なる過去の出来事としてではなく、未来への教訓としての意味を強く感じました。私たちが平和を享受できるのは、多くの人々がそのために努力し、犠牲になったからこそであり、そのことを忘れずに日々を過ごすことが私たちの使命であると痛感しました。

加えて、長崎の人々の復興への力強い意志や、平和を維持するための活動に触れることで、現代の私たちがどのように平和を守るべきか、一層考えさせられました。原爆の被害経験から学び取った教訓を、今後の世代へとしっかりと伝えていくことが、私たちに課された重要な役割であると実感しました。

平和企画

私達の未来へつなぐ小さな一歩

知らないもの　安達 功太郎

平和青年団を通して感じたのは、知らないことはまだまだあるということです。

団員の意見や、長崎ピースフォーラムで出会った人たちの意見、体験者の話、海外からの視点など、始まってからずっと新しいことばかりでした。

平和青年団という形ではなくなってしまいますが、これからも、自分の知らない世界を知り、平和にするために日々精進していきます。

平和追悼空間の中で　伊藤 優希

厳粛で独特な雰囲気が漂う中、自分は平和を実現するために何ができるか考えました。

「気候変動を止めることを通して平和を創りたい」そう強く思いました。

この壮大な目標に向けて今、僕は目の前のこと１つ１つに対し着実に取り組み努力することが大切だと思います。

平和であるために　上野 稟仁

平和の輪をつないでいくためには「認め合う」ことが大切だと思います。

争いの大きな原因は、互いの異なる点を認めず対立してしまうことだと考えます。人間は誰であっても１人で生きていくことはできません。

だからこそ互いを認め合い、助け合うことができたあかつきには、対立もなくなり平和であり続けると思います。

伝える！　亀田 知沙

私の小さな一歩は、平和青年団で行った活動を所属している消防少年団の仲間などに伝えることです。

例えば、博物館に行って感じたこと、ウクライナからの避難者との交流で知ったこと、長崎研修で学んだことを、自分の言葉で話していきます。

私の思う平和　亀山 紗来

未来を担う若い世代として、世界中の高校生と交流ができるフォーラムやワークショップに積極的に参加することが大事だと思います。

自国の中で議論するのも大事ですが、他国と交流をすることによって、核兵器についての見方や、核兵器の必要性についてどう思っているのか、お互いに理解することが大事だと思います。

伝える　小林 洋太

それは私たち高校生が平和構築のために一番できることだと研修を通して実感しました。今回のナガサキ派遣で学んだことを家族や友人に「伝える」。誰かと平和に対する意見を「伝え」、議論する。自分たちの意見を世界に「伝える」。

このように「伝える」活動は平和の輪を広める一歩になります。

今回の研修で交流した高校生平和大使のスローガン「ビリョクだけどムリョクじゃない！」を胸に「伝える」活動を通して平和の輪を広めていきたいと思います。

私達の 未来へつなぐ小さな一歩

平和のために　小林 莉奈

今回の長崎派遣を通じて、多くの体験談を聞き、特に日本の情勢をしっかり把握することの重要性を感じました。

日本の情勢がよくない方に傾きそうになった時、それをすぐに気づけるように、ニュースを見ることを心がけます。

架け橋としての白い鳩　古山　智

私は港区平和青年団の活動を通じて、異なる文化や価値観を理解し合うことが平和を築く鍵であると実感しました。

帰国子女である私だからこそ、異文化間の橋渡し役として、互いの違いを尊重し、平和の実現のために努力していきたいと思います。

私たちの My 平和宣言　須藤 栞央

沖縄から北海道までの全国の高校生と My 平和宣言を書きました。私は「命を大切にする」と記載しました。自分にも大切な人にも命があります。

争いがあってもなくても、命を大切にしなければいけない事にかわりないと思います。

命を大切にする事が私の感じる平和だと思います。

日々の幸せ　田中 陽暖

活動を通していく中で、戦中ではいつ大切な人が居なくなってもおかしくない状況だと学びました。

今私が家族や友達と何気なく当たり前のように笑顔で日々が過ごせるのは、平和だからと感じました。

そしてその平和が私にとっての幸せだからこそこれから過ごす１日１日を大切にしていきたいと思いました。

これは、私のペットの写真です、一緒にいると笑顔になります。

忘れないために　辻 孝太朗

平和青年団の活動を通して、平和について学んだだけでは平和に繋がらないと感じました。

日本は長く平和な時代が続いているので、戦争の悲惨さを知らない人もいるかもしれないと思います。

なので、周りの人に平和への重要さを伝えていきたいです。

私の思う平和　早川 妃空

港区平和青年団に入るまで、私はいつも見てる景色は普通なんだと思っていました。

でも港区平和青年団に入り、色んなことを知り、色んな景色を見て、いつものこの景色は普通じゃないんだと思いました。

今この瞬間、もしかしたらこの景色は普通じゃなくなるかもしれないけれど、私はこの景色がずっと続くことを願ってます。

全世界でこの景色を見られたらいいなと思いました。

平和企画

私達の未来へつなぐ小さな一歩

前兆　藤田 睦月

いつもと違う空。違う色の雲。鮮やかすぎるともいえるこの夕景を、僕は見れて幸運だと思った。

だが、これが戦時中ならどうだろう。ひどい空襲があったのだろうか。何か悪い事が起きる前兆じゃないか。

そのような思考にならないのは、今が平和だからということに他ならないだろう。

平和を作るはじめの一歩　細田 早紀

核のない平和な世界を作るためには、戦争の歴史を知るだけでなく、今まさに起こっている戦争についても考える必要があると思います。

ウクライナやパレスチナをはじめとする様々な地域で、今も戦争に苦しんでいる人たちのために、募金やボランティアといった自分にできる範囲の活動から始めてみようと思いました。

平和啓発活動
～みなと区民まつりへの参加～

日時：令和６年１０月１３日（日）
場所：区立芝公園エリア

＜主な活動＞
・平和の折鶴作成レクチャー
・「平和の灯」の写生の受付
・港区平和青年団活動パネルの紹介

修了式

活動終了後に、修了式を行いました。
団長から団員に修了書を交付し、団員からは平和青年団の活動の感想や今後の抱負が語られました。

長崎の思い出 DAY.1

高校生平和大使との交流

青少年ピースフォーラム（1日目）

青少年ピースフォーラム交流会

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

青少年ピースフォーラム（2日目）

原爆資料館見学

長崎の思い出 DAY.3

平和関連施設フィールドワーク

長崎の思い出

14 名の団員が教えてくれたこと

団長　**安達 伸幸**

私ごとですが、十代のときバートランド・ラッセルの平和哲学に感銘を受け、戦争のない世界の実現に貢献したいと、国連など国際機関で働くことを夢見て大学で国際法を専攻しました。

その傍ら、国を追われて日本に住むようになった難民を支援するボランティアをしました。日本の学校の勉強を家庭教師のように教えることと、イベントの手伝いが主な仕事でした。「葉っぱ」など基礎的な単語を知らないため理科を学ぶのに苦労し、工場で働きながら夜間高校に通っていた二十代の男性、あっという間に日本の学校に適応した十代の女性など、さまざまでした。いつも朗らかな彼らでしたが、母国での苦難、日本での苦労、受ける差別などを知り、平和とは戦争のない状態だけを指すのではないことを学びました。

その後夢はかたちを変え、平和のために組織で働くことはありませんでした。そして、原爆についての絵本を出版したとき尊敬する先輩から批判されたことをきっかけに、平和活動に直接関わることはやめようと決意しました。

数十年後、つきたての餅が食べたいだけの理由で息子の通う小学校の餅つき会に参加したことをきっかけに、PTA や港区の青少年活動に関わるようになりました。青少年委員になった初年度から平和青年団団長には興味を持っていましたが、上記の決意があったため、立候補する直前で思いとどまることを繰り返してきました。ところが令和６年度、いくつかの偶然が重なり団長を務めることになりました。

面接で高校生一人ひとりが平和についての想いを熱く語るようすを見て、こんな立派な高校生がいるのかと深く感銘を受けると同時に、十代のころの平和への情熱を思い出したのでした。

選ばれた団員との最初の研修は第五福竜丸展示館でした。そこには忘れかけていたラッセルの言葉が貼ってありました。その晩、飛行機でカンボジアに仕事に行きました。プノンペンでは図らずも虐殺博物館を訪ねる機会を得ました。学生時代に講演してもらったカンボジア難民の大学生 N 君のことを思い出しました。

団長になって以来、ありとあらゆる角度から、かつてのお前を思い出せと天から言われているような体験がつづきました。14 名の団員の姿に若き日の自分自身を重ね、忘れていた大切なことを彼らに教えてもらいました。

彼らの周囲には常に笑顔がありました。どこへ行っても熱心に人の話に耳を傾け、新しい仲間とすぐに友情を育んでいました。それこそが真の意味での、そして草の根レベルでの平和そのものです。彼らは「Bringer of Peace ～平和をもたらす者」だと思いました。

14 名の団員のみんな、本当にありがとう。総務部総務課人権・男女平等参画係職員の皆さま、そして区長をはじめとする区の職員の皆さま、貴重な機会をありがとうございました。

港区平和青年団派遣先及び派遣人数

昭和60年（1985年）8月15日	港区平和都市宣言

年　　度	派遣先（日程）	派遣人数
昭和61年（1986年）	広島市（8月5日～7日）	18
昭和62年（1987年）		18
昭和63年（1988年）		17
平成元年（1989年）		13
平成２年（1990年）	広島市（8月4日～6日）	12
平成３年（1991年）		12
平成４年（1992年）	長崎市（8月23日～24日） ※台風のため日程変更	9
平成５年（1993年）	長崎市（8月7日～9日）	12
平成６年（1994年）		12
平成７年（1995年）	広島市（8月5日～7日）	7
	長崎市（8月8日～10日）	7
平成８年（1996年）	長崎市（8月8日～10日）	9
平成９年（1997年）		9
平成10年（1998年）		8
平成11年（1999年）		8
平成12年（2000年）		8
平成13年（2001年）		8
平成14年（2002年）		8
平成15年（2003年）	長崎市（8月7日～9日）	8
平成16年（2004年）	長崎市（8月8日～10日）	8
平成17年（2005年）		9
平成18年（2006年）		6
平成19年（2007年）		6
平成20年（2008年）		3
平成21年（2009年）	長崎市（8月7日～10日）	7
平成22年（2010年）		9
平成23年（2011年）	長崎市（8月8日～10日）	9
平成24年（2012年）		9
平成25年（2013年）		5
平成26年（2014年）		8
平成27年（2015年）		8
平成28年（2016年）		8
平成29年（2017年）		8
平成30年（2018年）		5
令和元年（2019年）		7
令和３年（2021年）	区内施設にてオンライン参加(8月8日､9日)	10
令和４年（2022年）	長崎市（8月8日～10日）	9
令和５年（2023年）	区内で代替事業実施(8月9日)	12
令和６年（2024年）	長崎市（8月8日～10日）	15

派遣人数には団長を含みます。
令和２年（2020年）は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、事業を中止しました。
令和５年（2023年）は台風の影響により、長崎派遣を中止しました。

令和６年８月９日
August 9, 2024

被爆 79 周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 79th Nagasaki Peace Ceremony

式　次　第		Program
開　　式	１０：４５	Commencement
原爆死没者名奉安	１０：４６	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式　　辞	１０：４８	Opening Address
献　　水	１０：５２	Water offering
献　　花	１０：５４	Flower offering
黙　と　う	１１：０２	Silent prayer
長崎平和宣言	１１：０３	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	１１：１２	Pledge for Peace
児 童 合 唱	１１：１９	Children's chorus
来 賓 挨 拶	１１：２４	Addresses
合唱　千羽鶴	１１：４０	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉　　式	１１：４５	Closing words

目　　次

会場案内図…… 1ページ
司 会 者 名…… 2
献水の採水場所…… 2
原爆死没者名簿登載者数…… 2
式　　辞…… 3～4
長崎平和宣言…… 5～8
平和への誓い…… 9～10ページ
児 童 合 唱…… 11
千 羽 鶴（歌）…… 12
長崎市民平和憲章…… 13～14
長崎平和宣言<ことばの解説>… 15～18
平和祈念式典会場周辺図…… 19

長　崎　市
City of Nagasaki

長崎平和宣言

原爆を作る人々よ！
しばし手を休め　眼をとじ給え
昭和二十年八月九日！
あなた方が作った　原爆で
幾万の尊い生命が奪われ
家　財産が一瞬にして無に帰し
平和な家庭が破壊しつくされたのだ
残された者は
無から起ち上がらねばならぬ
血みどろな生活への苦しい道と
明日をも知れぬ“原子病”の不安と
そして肉親を失った無限の悲しみが
いついつまでも尾をひいて行く

これは２３歳で被爆し、原爆症と闘いながらも原爆の悲惨さを訴えた長崎の詩人・福田須磨子さんが綴った詩です。
家族や友人を失った深い悲しみ、体に残された傷跡、長い年月を経ても細胞を蝕み続け、様々な病気を引き起こす放射線による影響、被爆者であるが故の差別や生活苦。原爆は被爆直後だけでなく、生涯にわたり被爆者を苦しめています。
それでも被爆者は、「世界中の誰にも、二度と同じ体験をさせない」との強い決意で、苦難とともに生き抜いた自らの体験を語り続けているのです。
被爆から７９年。私たち人類は、「核兵器を使ってはならない」という人道上の規範を守り抜いてきました。しかし、実際に戦場で使うことを想定した核兵器の開発や配備が進むなど、核戦力の増強は加速しています。
ロシアのウクライナ侵攻に終わりが見えず、中東での武力紛争の拡大が懸念される中、これまで守られてきた重要な規範が失われるかもしれない。私たちはそんな危機的な事態に直面しているのです。

福田さんは詩の最後で、こう呼びかけました。
原爆を作る人々よ！
今こそ　ためらうことなく
手の中にある一切を放棄するのだ
そこに初めて　真の平和が生まれ
人間は人間として蘇ることが出来るのだ

核保有国と核の傘の下にいる国の指導者の皆さん。核兵器が存在するが故に、人類への脅威が一段と高まっている現実を直視し、核兵器廃絶に向け大きく舵を切るべきです。そのためにも被爆地を訪問し、被爆者の痛みと思いを一人の人間として、あなたの良心で受け止めてください。そしてどんなに険しくても、軍拡や威嚇を選ぶのではなく、対話と外交努力により平和的な解決への道を探ることを求めます。
唯一の戦争被爆国である日本の政府は、核兵器のない世界を真摯に追求する姿勢を示すべきです。そのためにも一日も早く、核兵器禁止条約に署名・批准することを求めます。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、北東アジア非核兵器地帯構想など、緊迫度を増すこの地域の緊張緩和と軍縮に向け、リーダーシップを発揮することを求めます。
さらには、平均年齢が８５歳を超えた被爆者への援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

世界中の皆さん、私たちは、地球という大きな一つのまちに住む「地球市民」です。
想像してください。今、世界で起こっているような紛争が激化し、核戦争が勃発するとどうなるのでしょうか。人命はもちろんのこと、地球環境にも壊滅的な打撃を与え、人類は存亡の危機に晒されてしまいます。
だからこそ、核兵器廃絶は、国際社会が目指す持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）の前提ともいえる「人類が生き残るための絶対条件」なのです。
ここ長崎でも、核兵器のない世界に向けて、若い世代を中心とした長年の動きがさらに活発になっています。今年５月には、若者版ダボス会議と呼ばれる国際会議「ワン・ヤング・ワールド」の平和をテーマとした分科会が、初めて長崎で開催されました。
世界の若い世代が主役となって連帯し、行動する輪が各地で広がっています。それは、持続可能な平和な未来を築くための希望の光です。

平和をつくる人々よ！
一人ひとりは微力であっても、無力ではありません。
私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができる。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができる。長崎は、そう強く信じています。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の誠を捧げます。
長崎は、平和をつくる力になろうとする地球市民との連帯のもと、他者を尊重し、信頼を育み、話し合いで解決しようとする「平和の文化」を世界中に広めます。そして、長崎を最後の被爆地にするために、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けてたゆむことなく行動し続けることをここに宣言します。

２０２４年（令和６年）８月９日
長崎市長　鈴 木 史 朗

港区平和都市宣言

かけがえのない美しい地球を守り、世界の恒久平和を願う人びとの心は一つであり、いつまでも変わることはありません。

私たちも真の平和を望みながら、文化や伝統を守り、生きがいに満ちたまちづくりに努めています。

このふれあいのある郷土、美しい大地をこれから生まれ育つこどもたちに伝えることは私たちの務めです。

私たちは、我が国が『非核三原則』を堅持することを求めるとともに、ここに広く核兵器の廃絶を訴え、心から平和の願いをこめて港区が平和都市であることを宣言します。

昭和６０年８月１５日

港　　区

区の木

ハナミズキ

区の花

アジサイ

バラ

発行番号　2024134- 6421

令和６年度　港区平和青年団活動報告書

白い鳩のつなぐ平和の輪

発行年月日：令和６年（2024 年）12 月
編　　集：港区平和青年団
発　　行：港区総務部人権・男女平等参画担当
〒 105-8511　港区芝公園 1-5-25
☎ 03-3578-2111（内線）2014

港区は、みどりの保全とごみの減量に努めています。
この「港区平和青年団活動報告書」は古紙を活用した再生紙を使用しています。

未来に伝え続ける。
平和を願う、
この仲間とともに。

令和６年度　港区平和青年団　活動報告書
白い鳩のつなぐ平和の輪